児童生徒を支援する力を高める校内研修に関する研究（第三年次）
―教育相談的な手法を生かした「校内研修実践資料（中学校版）」の開発を通して―

教育相談チーム

Ⅰ　研究の趣旨

本研究の目的は，校内研修実践資料の開発を通して教員及び教員組織の児童生徒を支援する力を向上させることにある。

平成22年度に教育相談チームが実施した「教員のメンタルヘルスに関するアンケート」の調査から，生徒指導力や人間関係を円滑に結ぶスキル等を身に付ける必要性，教員集団が組織として機能することの重要性が確認できた。そこで，平成23年度は児童生徒を支援する力を高めるために必要な教員の力を選定し，その力を効果的に高める「校内研修実践資料小学校版（試案）」を考案した。

平成24年度は，児童生徒を支援する力を高めるために必要な教員の力の分析を進めるとともに，学校において教員自らが校内研修を進めて児童生徒を支援する力を高める「校内研修実践資料（小学校版）」の開発を行った。その資料を用いて研究協力校で校内研修を試みたところ，研修のねらいに応じた力が高まったことが確認された。研究の成果については「校内研修実践資料（小学校版）」としてまとめた。今後の課題としてあがったのは，どのようにして校内研修実践資料集を普及し活用してもらうかということであった。

本年度は，昨年度に引き続き「校内研修実践資料（中学校版）」（以下，実践資料）の開発を通して，教員及び教員組織の児童生徒を支援する力を向上させることに加えて，昨年度の課題としてあげられた校内研修実践資料集の普及のためのPR及び校内研修の進行者の育成を行っていくこととした。

Ⅱ　研究の概要

1　主題についての考え方

⑴　「児童生徒を支援する力」について

本研究では，次の二つを「児童生徒を支援する力」と押さえた。

〈個人として身に付けたい力〉
○　児童生徒を理解し，問題へ対応する力と人間関係を築く力
〈組織として身に付けたい力，状態〉
○　互いに認め合い協力し合う力（職場）

⑵　なぜ校内研修なのか

児童生徒を支援する力を高めることへのアプローチとして校内研修に着目したのは，校内研修がその機能として，教員個々の力量向上と教員集団の組織力向上を併せ持つためである。

2　研究内容・方法

⑴　児童生徒を支援する力を高める研修についての理論研究及び実践資料の考案

①　「児童生徒を支援するために必要な教員の力」の構成内容の分析
②　校内研修の進行者や研修者である教員側に立っての実践資料の考案
③　有効性を検証するアンケート調査の実施

⑵　研究協力校（中学校）での実践と検証

①　研究協力校での実践資料（案）の検証と修正
②　実践につなげるための研修だよりの発行

⑶　校内研修実践資料集の活用の促進

①　校内研修実践資料集の活用に関する質問の受け付け
②　校内研修実践資料集の普及のためのPR
・　Webサイトへの掲載
・　研究成果の発信
・　校内研修実践資料集の紹介・配布

⑷　校内研修実践資料集の活用のための進行者育成

①　専門研修（教育相談実践講座）における校内研修実践資料集を活用した実習
②　専門研修（教育相談実践講座）での実習終了後の各学校での研修者による実践

Ⅲ　研究の実際

1　児童生徒を支援する力を高める研修についての理論研究及び実践資料の考案

⑴　「児童生徒を支援するために必要な教員の力」の構成内容の分析

「児童生徒を支援するために必要な教員の力」については，平成23年度に「教員のメンタルヘルスに関するアンケート」の調査結果を分析して，以下の力を選定した。(『福島県教育センター研究紀要　第41集』参照)

〈個人として身に付けたい力〉
Ａ１　児童生徒を個人・集団として理解する力
Ａ２　コミュニケーション力（相談面接のスキルと自己表現のスキル）
Ａ３　児童生徒間の人間関係づくりを促進する力
Ａ４　指導困難事例への対応力
〈組織として身に付けたい力，状態〉
Ｂ１　同僚と助け合い協力して活動する力，職場
Ｂ２　同僚間で承認感を高め合う職場

昨年度に引き続き「児童生徒を支援するために必要な教員の力」を高められるようその力の分析を進め，力を細分化・具体化してレベル別に分け，教員がどのような力（知識・スキル・態度）を身に付けなければならないかを考えた(**図１**)。このように，それぞれの力を精査して構造化を図り，「学びの視点」「学びの内容」として研修の要点をより明確にし，研修者が必要となる知識・スキル等を確実に学べるようにした。

また，昨年度作成した「校内研修実践資料（小学校版)」と今年度作成した「校内研修実践資料（中学校版)」により，全ての力・内容についての資料を完成させた。

⑵　校内研修の進行者や研修者である教員側に立っての実践資料の考案

今年度も教育相談関係の研修や校内研修の進行経験が十分でない教員が進行者となることを想定し，容易に流れ（はじめに→説明→演習→まとめ）をつかみ円滑な進行ができ，研修者も無理なく学ぶことができる構造化された実施・進行案を作成した。

そして，この実施・進行案を基に内容の関連を図りながら，以下の五つの資料を加え，この資料のみで校内研修を行うことができるようにした。

さらに，教員が共に活動する中で，他の教員への理解が深まったり互いに承認し合ったりできるように考えた。(『福島県教育センター研究紀要　第42集』参照)

	アンケート結果	力	左の力を構成する力・内容	学びの視点（キーワード）	学びの内容（下位のキーワード）	○教育相談的な手法→実践
「児童生徒を支援するために必要な教員の力」を構成する力・内容の分析	●人間関係にストレス ・保護者、管理職、同僚 ・児童生徒 ●生徒指導にストレス ○児童生徒への対応 ○児童生徒からの信頼	児童生徒を個人・集団として理解する力	児童生徒に対する一般的な理解力	・発達課題 ・発達障害	・エリクソンの発達課題、発達をつなぐという視点 ・環境の大切さ、自己評価を低下させない ・ＬＤ、ＡＤＨＤ、自閉症、高機能自閉症	○児童心理と発達課題 →児童生徒の発達をつなぐ
			児童生徒に対する個人的な理解力	・多角的な理解 ＋ ・多面的な理解 ・自己への気付き	・主観的な理解（自分自身の目・枠） ・客観的な理解（観察法、質問紙法、検査法、事例研究法） Q-U（満足感と意欲） ・共感的な理解（事実と感情の理解） ・能力面、心理面、環境面、生育歴 ・エゴグラム（親・大人・子どもの自我）、感受性を高める	○交流分析（エゴグラム） →自己への気付きを基にした児童生徒理解の方法等 ○Q-U →Q-Uを活用した学級集団づくり
			集団を理解する力	・学級集団のアセスメント ・集団理解	・観察法・面接法・質問紙法 ・客観的な理解、Q-U（リレーションとルール）	○Q-U →Q-Uの結果を生かした学級集団づくり
	●人間関係にストレス ・保護者、管理職、同僚 ・児童生徒	コミュニケーション力（相談・自己表現スキル）	相談面接における基礎・基本力	・傾聴と基本的技法	・ペーシング、受容、繰り返し、支持、質問（未来肯定質問） ・三つの承認、Ⅰ, Weメッセージ	○相談面接 →保護者との相談面接 →保護者からの電話対応
			児童生徒との信頼関係を築く力 と 保護者と協力関係を結ぶ力	・信頼関係 ・協力関係	・気持ち・感情の理解　事前の準備、プラスの情報収集 ・労をねぎらう、チームで対応、肯定的関心、プラスの情報	
			教師自身の望ましい自己表現力	・自己の感受性への気付き ・アサーティブな自己表現	・エゴグラム（親・大人・子どもの自我） ・自分と相手の相互の尊重、言語的・非言語的（アサーション）	○アサーショントレーニング →教師自身の望ましい自己表現等
	●人間関係にストレス ・保護者、管理職、同僚 ・児童生徒 ●生徒指導にストレス ○児童生徒への対応 ○児童生徒からの信頼	人間関係づくりを促進する力	グループアプローチの理論と手法に関する知識	・好ましい人間関係づくり（と社会性） ・開発的・予防的（な手法）	・学級集団の２つの側面（学習集団と生活集団） ・自己肯定感、人とかかわる技能、社会性 ・ＳＧＥ、ＰＡ、ＳＳＴ、アサーショントレーニング、ストレスマネジメント	○ＳＧＥ・ＰＡ・ＳＳＴ アサーショントレーニング・ストレスマネジメント →学級の人間関係づくり →学級学年懇談会で生かすＳＧＥ ○Q-U →Q-Uの結果を生かした学級集団づくり
			グループアプローチの理論と手法を実践する力	・人間関係の体験と振り返り ・教育相談の手法名　ＳＧＥ ＳＳＴ ＡＴ	・実感・気付き、感情・思考・行動の教育 ・インストラクション・エクササイズ・振り返り ・教示・モデリング・リハーサル・フィードバック、配慮とかかわりのスキル ・アサーティブな自己表現（アサーション）	
	●問題への対処 ●相談するのが苦手、受けるのも苦手 ○児童生徒への対応 ○児童生徒からの信頼	指導困難事例への対応力	情報収集力	・多角的・多面的な情報収集	・問題はＳＯＳのサイン（複数の目から） ・能力面、心理面、環境面、生育歴	○インシデントプロセス事例研究 ○Q-U事例研究 →問題行動への対応
			情報分析力	・具体的な指導援助策（アセスメント）	・原因はマッチング ・マズローの欲求の５段階 ・解決指向（よさ・例外探し、リソース探し） ・課題に合わせて、多くの違った視点から	
			課題解決に向けた実践力	・組織を生かす、連携	・複数の目で、優先順位 ・チーム援助、役割分担	
	○和やかな職場の雰囲気 ○自分のよさの承認 ●相談するのが苦手、受けるのも苦手	助け合い協力して活動する力・職場	職員間の結び付き	（子どもや学級の話題、仕事の援助）		○ＳＧＥ・ＰＡ・ＳＳＴ ○インシデントプロセス事例研究 ○Q-U事例研究
			職員間の情報連携	（学級経営の情報交換、子どもの気になる情報の交換）		
			職員間の行動連携	（予防的・問題解決的な学年会）		
	○自分のよさの承認 ○和やかな職場の雰囲気 ●相談するのが苦手、受けるのも苦手	承認感を高め合う職場	職員間の承認１	（日常のあいさつ）		○コーチング ○ＳＧＥ
			職員間の承認２	（労いの言葉かけ･励まし、賞賛）		
			被援助力	（援助力、被援助力）		

図１　「児童生徒を支援するために必要な教員の力」の構成内容一覧

- 演習進行案（進行者用）

  指示・発問例から演習の流れをつかむ資料
- プレゼン資料（進行者・研修者）

  説明部分や演習部分で使う資料（データ）
- テキスト資料（進行者・研修者）

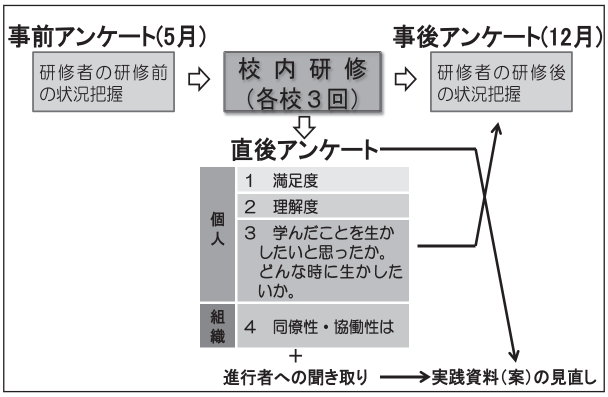
  主に説明部分で活用する資料
- 演習資料（進行者・研修者）

  演習部分で使用する資料
- 参考資料（進行者・研修者）

  テキスト資料に盛り込めなかった諸理論や技法の詳細をまとめた資料

⑶　有効性を検証するアンケート調査の実施

調査にあたっては，「事前・事後アンケート」「直後アンケート」の２種類のアンケートを作成し，実践資料（案）に基づく校内研修の有効性を以下のような流れで確認することとした。



「事前・事後アンケート」は，教員の教育相談的な手法に関する理解の深まりとそれに伴う行動の変容をとらえることを目的とし，研修前と全研修終了後に行った。「児童生徒を支援するために必要な教員の力」のＡ１～Ｂ２それぞれについて，理解と行動に関する３～５問の設問を設定し，評定尺度法による選択式（５件法）で尋ねた（**図２**）。さらに，進行者と管理職から校内研修実践後の感想や意見等の聞き取り調査も行った。

「直後アンケート」は，各校内研修終了直後に実施した。校内研修のねらいが，知識やスキルの獲得にもなっていることから，満足度とともに理解度の測定も行った。理解度の把握は，自己評価だけでなく「学びの視点」のキーワードを活用し，客観的にとらえた。さらに，行動化を促す質問も取り入れ，参加者が研修で学んだ知識・スキルを活用につなげるようにした。調査は，選択式（５件法）と記述式を組み合わせて実施し，進行者へは聞き取り調査も行い，進行者の視点を付加して実践資料の見直しを進めた。

Ｉ　先生自身が、日頃、生徒や保護者、同僚と接するときに行っていることに関して、あてはまる数字に○を付けてお答えください。

※　数字には右のような意味があります。　あてはまる 5 － ややあてはまる 4 － どちらでもない 3 － あまりあてはまらない 2 － あてはまらない 1

1　私は、中学校段階の発達の特徴や発達課題をふまえて生徒とかかわっている。	5－4－3－2－1
2　私は、ＬＤやＡＤＨＤ等の発達障害の特徴について理解したうえで生徒とかかわっている。	5－4－3－2－1
3　私は、生徒を自分の見方のみで理解するのではなく、アンケート調査や検査なども活用して理解を行っている。また、感情面からも生徒を理解している。	5－4－3－2－1
4　私は、能力面･心理面･環境面･生育歴など、幅広い面から生徒の理解を行っている。	5－4－3－2－1
5　私は、生徒の学級生活への満足感など、集団の状況を客観的に把握して学級への指導を行っている。	5－4－3－2－1
6　私は、相談面接の際に、うなずきを入れたり相手の話を繰り返したりして気持ちを受け止めながら話を聴いている。	5－4－3－2－1
7　私は、相談面接の際に、生徒のよい結果を称賛するだけでなく、生徒の途中の努力や取り組みを認めそれを伝えている。	5－4－3－2－1
8　私は、相談で来校した保護者に対して、労いの言葉をかけたり努力していることを支持したりしながら接している。	5－4－3－2－1
9　私は、他者からの視点やエゴグラムの検査等から、自分の生徒の見方やとらえ方の傾向をつかんでいる。また、それをふまえて生徒とコミュニケーションをとっている。	5－4－3－2－1
10　私は、相手の気持ちや立場を大切にしながら話をしている。また、必要なときには、自分の考えや意見・気持ちを率直に話している。	5－4－3－2－1
11　私は、学級の集団づくりや人間関係づくりの学習を意図的に行っている。	5－4－3－2－1
12　私は、構成的グループエンカウンター・ソーシャルスキルトレーニング・アサーショントレーニングなどの手法を個や集団の指導・援助に活用している。	5－4－3－2－1
13　私は、集団づくりや対人関係の学習の際は、活動の中にリハーサル（練習）やロールプレイ（役割演技）を取り入れるとともに、生徒と活動の振り返りを行っている。	5－4－3－2－1
14　私は、問題を抱えた生徒への支援を考えるとき、問題解決に向けて、能力面・心理面・環境面・生育歴などの情報を幅広く集めている。	5－4－3－2－1
15　私は、問題を抱えた生徒への支援を考えるとき、原因の追求に留まらず、生徒のよさやできていることにも注目して具体的な支援策を立てている。	5－4－3－2－1
16　私は、問題を抱えた生徒を支援するとき、一人で対応が困難な場合は、同僚や学年などに協力を依頼したり、共に対応してもらったりしている。	5－4－3－2－1
17　私は、同僚と元気にあいさつをしている。また、あいさつをされたときは、相手を見てあいさつを返している。	5－4－3－2－1
18　私は、同僚の仕事への頑張りや成果を認めて声をかけている。	5－4－3－2－1
19　私は、生徒のことや学級の様子について同僚とよく話をしている。	5－4－3－2－1
20　私は、同僚から仕事の助けを求められたときは、進んで援助・協力している。	5－4－3－2－1
21　私は、集団づくりや人間関係づくりの学習など、よりよい学級経営について同僚と話をしている。（情報を交換している。）	5－4－3－2－1
22　私は、生徒の気になる情報を、関係する同僚にしっかりと伝えている。また、問題を抱えた生徒などへの支援について話をしている。	5－4－3－2－1
23　集団づくりや人間関係づくりの学習など、積極的な生徒指導について学年会などで話題にしている。また、学年全体で具体的に取り組みを進めている。	5－4－3－2－1
24　問題を抱えた生徒などに対して、学年などで支援策について話し合っている。また、役割を分担するなどして組織的に対応している。	5－4－3－2－1
25　私は、困った時には同僚に援助を求めている。	5－4－3－2－1

Ａ１	児童生徒を個人・集団として理解する力	設問１～５
Ａ２	コミュニケーション力（相談面接・自己表現のスキル）	設問６～10
Ａ３	児童生徒間の人間関係づくりを促進する力	設問11～13
Ａ４	指導困難事例への対応力	設問14～16
Ｂ１	同僚と助け合い協力して活動する力，職場	設問19～24
Ｂ２	同僚間で承認感を高め合う職場	設問17･18･25

図２　身に付けたい力と設問

２　研究協力校（中学校）での実践と検証

⑴　研究協力校での実践資料（案）の検証と修正

研究協力校（中学校２校）の実態とニーズを把握し，それに応じた実践資料（案）を作成した。そして，その資料に基づいて校内研修実践を行ってもらい，資料の有効性の検証をした。さらに，実践後の反省を基にして資料の修正も行った。

◇　Ａ中学校での実践

実践１（４月）「学級の人間関係づくり

ー構成的グループエンカウンターー」

＊身に付けたい力　人間関係づくりを促進する力

＊キーワード　開発的・予防的，体験と振り返り

〔研修の内容〕

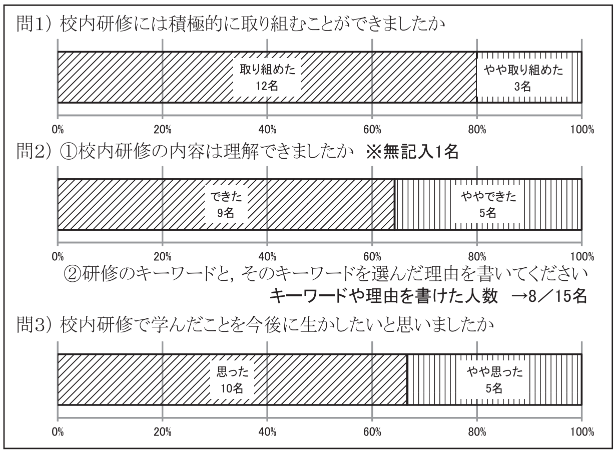
導入として，進行者の動きをまねる「ミラーリング」を行い，和やかな雰囲気で研修が始まった。ねらいを確認した後は，開発的・予防的な教育相談の必要性やその手法・効果についての説明があった。構成的グループエンカウンター※1の進め方や留意点などについての確認があり，「あなたは名探偵」「サイコロトーキング」「○○○の言葉」のエクササイズを実際に体験した。振り返りでは，

○○○の言葉

「課題を解決するために，自然と役割を作って協力することができた」「学年の枠をとって，全校集会などでもこの研修を生かせると思った」といった，開発的・予防的な教育相談の手法を使った人間関係づくりの効果についての感想が述べられた。

※１　構成的グループエンカウンター〔SGE〕とは，仲間との心のふれあいを体験しながら，自他理解を深めたり承認感を高めたりするグループ体験活動である。

〔直後アンケートの結果〕



〔参加者の感想〕

エクササイズだけで終わるのではなく，感想を言ったり，聞き合ったりすることの大切さを，体験を通して理解できた。

〔進行者の感想〕

実施前は先生方がどの程度活動に取り組んでくれるか不安だったが，研修が始まると先生方が予想以上に熱心に取り組んでいたので，進行していて楽しくなった。一つ一つの資料が分かりやすく，資料の言葉をそのまま使って進行することができた。

〔成果と改善の視点〕

開発的・予防的な教育相談の手法を用いた演習を体験することで，お互いをより理解し，あたたかな人間関係が築けることを実感していた。自己理解や他者理解がさらに深まるように，演習進行案に具体的な振り返りの視点を加え，進行者が振り返りの場面をイメージできるようにした。

実践２（８月）「保護者からの電話対応」

＊身に付けたい力　保護者と協力関係を結ぶ力

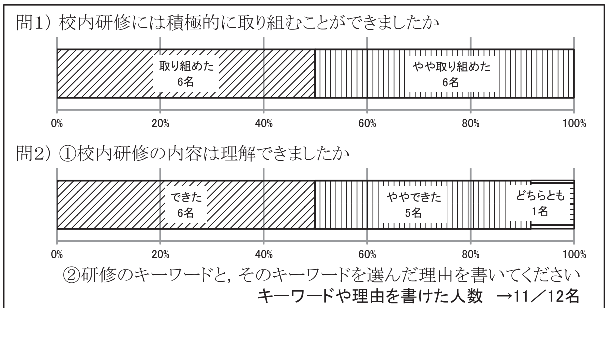
＊キーワード　傾聴，協力関係

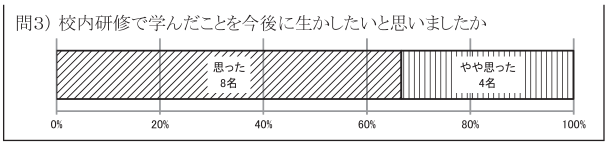
〔研修の内容〕

導入として，自分の持っている相手へのイメージが実際とは異なることがあることを体験する「WANTED」を行った。ねらいを確認した後は，保護者からの電話対応の流れと保護者との協力関係を築く大切さについての説明があった。その後の演習では，「頻繁に学校に電話をしてくる依存的な保護者」と「怒り心頭の保護者」の二つの事例に対する電話対応を行った。保護者役と担任役の演習を観察者役が客観的な視点で見取り，気付いたことを伝え合った。保護者との協力関係を築くための電話対応の仕方について，研修者同士で深めていた。

３人組での電話対応演習

〔直後アンケートの結果〕





〔参加者の感想〕

本当に起こり得るような事例だったので，真剣に演習に取り組んだ。

〔進行者の感想〕

実施・進行案はとても使いやすく，留意点の内容も含めながら進行できた。演習場面の設定に手間取り，予定よりも時間がかかってしまった。

〔成果と改善の視点〕

演習では，保護者の訴えを傾聴しながら，保護者の感情を受け止めようとする姿勢が見られた。振り返りでは，「観察者からのアドバイスを受け，改めて同僚からのアドバイスをもらうことの大切さを感じた」などの意見が出され，同僚と協力する大切さを確認することができていた。演習場面の設定の時間を短縮するため，演習資料に席の配置を図示し，視覚的に理解できるようにした。

実践３（11月）「児童生徒の発達をつなぐ

－発達課題，校種間連携の理解を通して－」

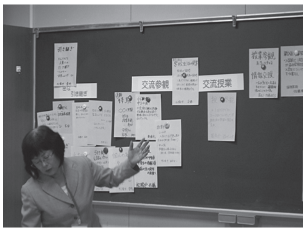
＊身に付けたい力　児童生徒に対する一般的な理解力

＊キーワード　発達課題，発達をつなぐ，連携

〔研修の内容〕

本実践は，研究協力校の中学校教員15名と同中学校区の小学校教員８名，近隣の高等学校教員２名による合同研修の形で行われた。

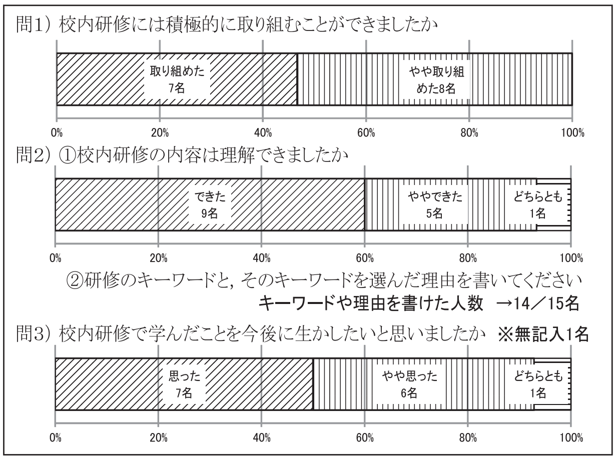
導入として,「学校版　○○といえば」を行った。「子どもの好きな行事といえば･･･」といった質問から連想するイメージを伝え合い，同じ質問でも校種によって教員の持つイメージが異なることに気付いた。個別理解と併せて，一般的な発達の基準となる発達課題の視点から生徒をとらえ，より多面的な視点で児童生徒理解をする重要性について説明があった。その後の演習では，児童生徒の問題行動を発達課題の視点からとらえ，その児童生徒への支援策を研修者同士で話し合った。次に，中１ギャップなどの校種間の接続期に起きている児童生徒の不適応問題とその原因についての説明があった。その後の演習では，一人一人が校種間の連携で実践できそうなことをあげ，各校種で子どもの発達をつなぐ※2という視点を持つことが重要であることを全体の協議の中でまとめた。



校種間連携の具体策についての協議

※２　発達をつなぐとは，一人の子どもの発達は連続的なものであるので，継続的な支援が必要であること。

〔直後アンケートの結果〕



〔参加者の感想〕

一人一人の生徒がよりよく成長するためには，発達をつないでいく必要があると思った。

〔進行者の感想〕

実施前は演習の進め方に不安があったが，実際に演習進行案に沿って進行してみると，予想以上にスムーズに演習を進めることができた。事前に板書計画を立てていたので，全体の協議で意図的に先生方の意見を取り上げることができた。

〔成果と改善の視点〕

子どもの発達をつなぐ視点を持つ重要性を，各校種の教員が共有することができた。全体の協議の際に意見のまとまりが整理されるように，演習進行案に板書例を示した。

◇　Ｂ中学校での実践

実践１（５月）「Q-Uを活用した学級集団づくり

－アセスメントとその対応－」

＊身に付けたい力　児童生徒を個人・集団として理解する力，指導困難事例への対応力

＊キーワード　集団理解，満足感・意欲，多くの違った視点

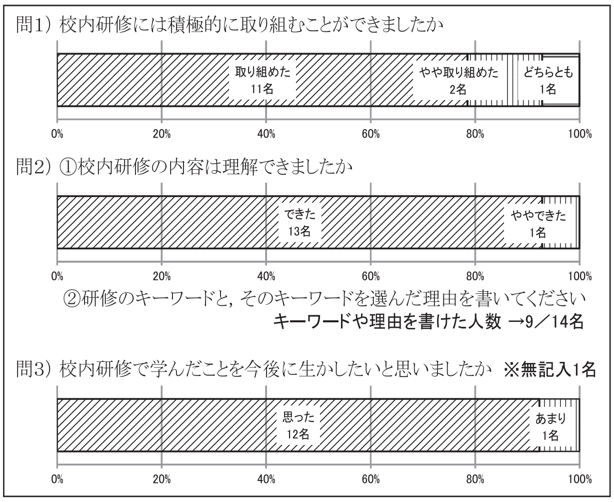
〔研修の内容〕

導入では，無言でじゃんけんをし，全員同じものを出すようにする「ミラクルじゃんけん」を行い，力を合わせて取り組む雰囲気を高めて研修を始めた。ねらいを確認した後は，生徒理解には個別の理解とともに集団の理解が大切であることとQ-U※3に関する基礎的な内容について説明された。その後の演習では，学級担任の一人からQ-Uの結果を提供してもらい，全員でアセスメントと対応策を考えた。最後は，進行者から，Q-Uの結果からは課題だけでなく，よさも読み取ることができるので，よさを伸ばすという視点でも活用すること，また今回のように複数の目で事例研究をすることが大切であるというまとめがされた。

グループでの読み取り

※3　Q-Uとは，「楽しい学校生活を送るためのアンケート」という学級集団の状態や児童生徒個人の満足感と意欲を測定できる心理テストである。

〔直後アンケートの結果〕



〔参加者の感想〕

個人と集団を知ること，教員間で課題や支援策を共有することを確実に行っていきたい。

〔進行者の感想〕

FAX質問用紙を使用して，事前に準備を整えることができ大変ありがたかった。Q-Uの目的など，なかなか知る機会がない内容について研修することができ，有意義だった。

〔成果と改善の視点〕

研修者は，自分の学級のことのように熱心に協議をしていた。また，Q-Uの結果を活用した学級づくりをしていきたいという前向きな感想が多くあった。より使いやすい資料とするため，事例研究の際の資料作成の例にもなり，Q-Uを実施していない学校では演習資料としても使用できる「模擬事例資料」も作成した。

実践２（７月）「Q-Uの結果を生かした学級集団づくり ーアサーショントレーニングと構成的グループエンカウンターー」

＊身に付けたい力　児童生徒を個人・集団として理解する力，人間関係づくりを促進する力

＊キーワード　課題に応じた取り組み，リレーションとルール

〔研修の内容〕

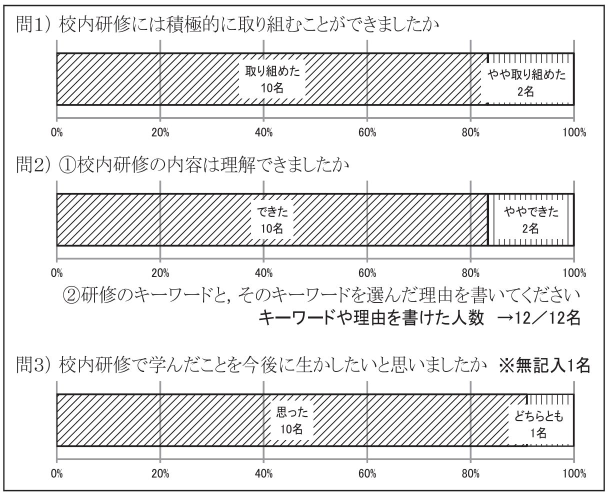
導入として，好きな食べ物というテーマで「好き好きビンゴ」を行った。個性的な好みが多く，なかなかビンゴにならなかったが，お互いに新たな一面が見え，笑いも起きて和やかな雰囲気で研修が始まった。まず，Q-Uについて前回の研修内容の復習をした。続いて，人間関係づくりのための教育相談的手法とQ-Uの結果から見えた学級の課題に応じた活動についての説明があった。その後，アサーショントレーニング※4を通して学級のルールの確立を図る演習と，構成的グループエンカウンターを通して生徒間のリレーションを深める演習を行った。アサーショントレーニングでは，初めに３タイプの自己表現※5について理解し，場面を設定してアサーティブな自己表現の練習をした。構成的グループエンカウンターでは，「なんでもバスケット」と「いいとこ四面鏡」というエクササイズを通して，お互いの新たな面を知ったり，お互いにいいところを伝え合ったりした。

なんでもバスケット

※4　アサーショントレーニングとは，自分も相手も大切にしながら，意見や気持ちを表現できるようにするトレーニングである。

※５　３タイプの自己表現とは，自分を主張して相手を抑えたり，無視したりする「攻撃的な自己表現」，自分を抑えて相手を立てる「非主張的な自己表現」，自分も相手も大切にする「アサーティブな自己表現」のことである。

〔直後アンケートの結果〕



〔参加者の感想〕

生徒たちにもやらせてみたくなった。もう一度Q-Uの結果を見直し，改善が図られるように努力してみようと思った。

〔進行者の感想〕

過去に一度しか実施したことがないアサーショントレーニングはうまくできるかどうか心配だった。特に演習の振り返りの際は，先生方の発言に対してなかなかうまく言葉を返すことができなかった。今回のような研修は，実践につなげることができるため大変有効だと思う。

〔成果と改善の視点〕

演習を通して実際に体験することで，生徒の気持ちをより理解することができたり，学級でも行ってみたいという気持ちになったりした研修者が多かった。経験のない教員でも負担なく進行ができるように演習進行案に振り返りの視点を加えるようにした。

実践３(11月)「自己への気付きを基にした生徒理解」

＊身に付けたい力　コミュニケーション力，児童生徒を個人・集団として理解する力

＊キーワード　感受性を高める，自己への気付き，自分自身の目・枠

〔研修の内容〕

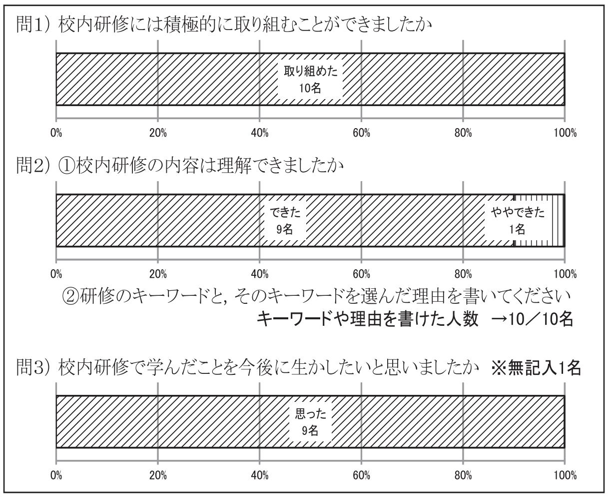
ウォーミングアップでは，錯視画を見て同じものでも見る人によって違った見方になったり，見えているつもりでも見えていないところがあったりと見方に癖があることに気付いた。次に，生徒を理解する際には，感受性（気付きのアンテナ）を高めるために，自分自身の目・枠がどのようなものかを知ることが大切であるとの説明があった。続いて，五つの自我状態※6について確認し，エゴグラム※7を使って自分がどの自我状態の特性が強いのかをとらえた。それを基に「自我状態をイメージしよう」の演習では，五つの自我状態の傾向が理解できたかを確認し，「エゴグラムと関わりのパターン」の演習では，自我状態を意識した関わり方でロールプレイした。最後に進行者から，自分自身の目・枠がどのようなものかを理解し，それを意識した関わりをしていくことが大切とのまとめがあった。

生徒役と先生役でロールプレイ

※６　五つの自我状態とは，私たちが感じたり，考えたり，行動したりするときの基になる「批判的な親」「保護的な親」「大人」「自由な子供」「順応な子供」の五つの心の状態のことである。

※７　エゴグラムとは，各個人の自我状態をグラフで表したものである。

〔直後アンケートの結果〕



〔参加者の感想〕

自分自身をふり返ることができ，今後生徒たちとどう向き合っていけばいいか考えさせられた。

〔進行者の感想〕

「感受性」と「自我状態」の説明が先生方にうまく伝わっていないように感じた。エゴグラムは，私

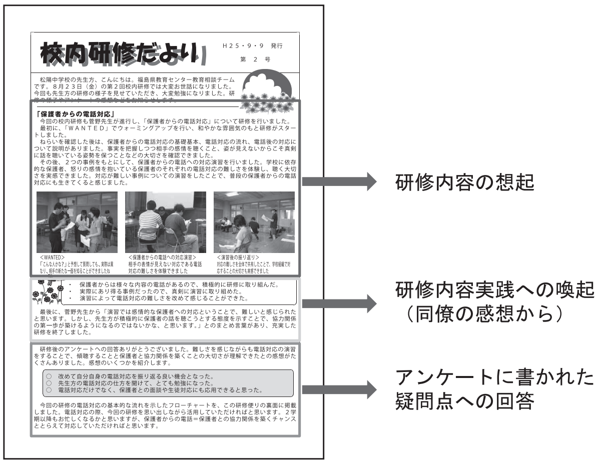
自身興味があったので研修の準備も苦にならず，活用の仕方など勉強できてよかった。

〔成果と改善の視点〕

自分自身についてや生徒への関わり方について考えるよい機会となったようだ。「感受性の大切さ」「自我状態の五つのタイプ」の説明が分かりにくかったので，実施・進行案の説明部分を再考した。

⑵　実践につなげるための研修だよりの発行

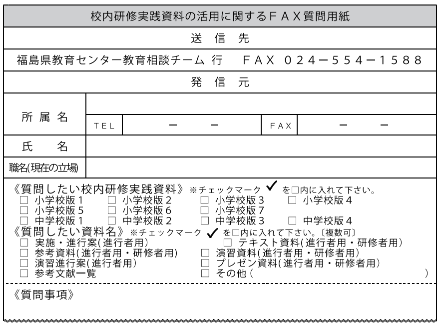
研修だよりは，校内研修後の実践を促す目的で作成した。そのため，以下の内容を盛り込み，校内研修実践の２週間後を目安に発行した。



３　校内研修実践資料集の活用の促進

⑴　校内研修実践資料集の活用に関する質問の受け付け

校内研修実践資料集を使って進行をしようとする教員が気軽に質問でき，より校内研修を進めやすくするために質問を受け付けるFAX質問用紙を作成し，資料と共にWebアップした（**図３**）。また，質問に対するFAX回答用紙も準備し，質問受け付けへの体制を整えた。



校内研修実践資料の活用に関するＦＡＸ質問用紙

送　信　先

福島県教育センター教育相談チーム 行　ＦＡＸ ０２４－５５４－１５８８

発　信　元

所 属 名				
	TEL	－　－	FAX	－　－
氏　　名				
職名(現在の立場)				

《質問したい校内研修実践資料》※チェックマーク ✓ を□内に入れて下さい。
□ 小学校版１　□ 小学校版２　□ 小学校版３　□ 小学校版４
□ 小学校版５　□ 小学校版６　□ 小学校版７
□ 中学校版１　□ 中学校版２　□ 中学校版３　□ 中学校版４

《質問したい資料名》※チェックマーク ✓ を□内に入れて下さい。〔複数可〕
□ 実施・進行案(進行者用)　□ テキスト資料(進行者用・研修者用)
□ 参考資料(進行者用・研修者用)　□ 演習資料(進行者用・研修者用)
□ 演習進行案(進行者用)　□ プレゼン資料(進行者用・研修者用)
□ 参考文献一覧　□ その他（　　　）

《質問事項》

図３　FAX質問用紙

⑵　校内研修実践資料集の普及のためのPR

・　Webサイトへの掲載

・　研究成果の発信

・　校内研修実践資料集の紹介・配布

研究協力校で実践と検証を行った実践資料は，福島県教育センターのWebサイト（http://www.center.fks.ed.jp/）に掲載し，ダウンロードして各学校において活用できるようにした。

また，県研究発表会や所報ふくしま「窓」などで成果を発信したり，各研修講座や出前講座でも積極的に紹介・配布を行ったりして校内研修実践資料集の普及に努めた。

４　校内研修実践資料集の活用のための進行者育成

⑴　専門研修（教育相談実践講座）における校内研修実践資料集を活用した実習

実際に進行を経験した人を増やすことで校内研修実践資料集の活用を図ることができると考え，教育相談実践講座（中期）の「校内研修実習」において，受講者の中から二人を選び代表として実習の進行をしてもらった。Ａ教諭は「校内研修実践資料（小学校版）」の中から「学級の人間関係づくり①－構成的グループエンカウンター－」，Ｂ教諭は「自己への気付きを基にした児童生徒理解の方法」の資料を活用して実習を行った。

楽しくエクササイズ

⑵　専門研修（教育相談実践講座）での実習終了後の各学校での研修者による実践

講座での実習終了後，講座の際に進行をしてもらった二人を除いた全受講者（20名）に，各学校で校内研修実践資料集を使った実践をしてもらった。そして，FAX報告用紙で，活用した資料や参加者，資料の使いやすさと成果や課題を報告してもらった（**図４**）。

教育相談実践講座　校内研修実施に関するＦＡＸ報告用紙

送　信　先

福島県教育センター教育相談チーム 行　ＦＡＸ ０２４－５５４－１５８８

発　信　元

所 属 名				
	TEL	－　－	FAX	－　－
氏　　名				

《活用した校内研修実践資料》※チェックマーク ✓ を入れて下さい。
□ 小学校版１　□ 小学校版２　□ 小学校版３　□ 小学校版４　□ 小学校版５
□ 小学校版６　□ 小学校版７
□ 中学校版１　□ 中学校版２

《校内研修の参加者》・・・ 計　　名 ※チェックマーク ✓ を入れて下さい。
□ 校長　□ 教頭　□ 教諭　□ 養護教諭
□ 講師　□ スクールカウンセラー　□ その他(　　　)

《資料の使いやすさ》※数字を○で囲んで下さい。

	使いやすい	やや使いやすい	やや使いづらい	使いづらい
【実施・進行案】	4	3	2	1
【テキスト資料・参考資料】	4	3	2	1
【演習資料・演習進行案】	4	3	2	1
【プレゼン資料】	4	3	2	1

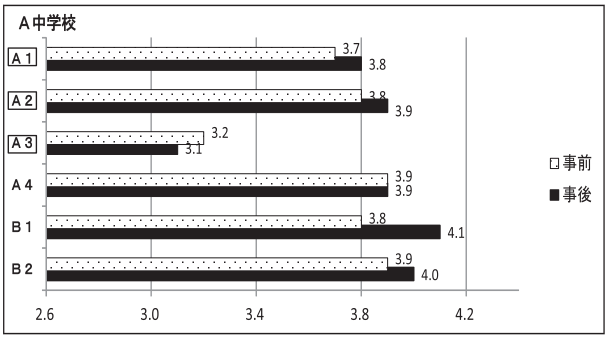
《○成果と●課題》
例 ○ 先生方が熱心に研修に取り組んでくださり、「とても分かりやすかった。」との感想をいただいた。
○ 研修で行ったことを、研修後に自分の学級で実践されていた方もいた。
● 演習の振り返りで、先生方の意見をうまくまとめることができなかった。
● 次回の研修では、もっと多くの先生方に参加してもらえるように働きかけたい。

図４　FAX報告用紙

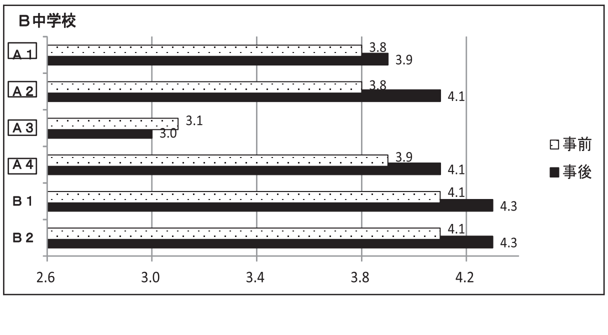
Ⅳ　研究のまとめ

1　実践資料の有効性の検証

各中学校の調査の結果は以下のとおりである。なお，グラフ中の □ は実践した校内研修の内容と「深い関連のある領域」である（P23 **図２**参照）。



Ａ中学校では，校内研修の内容と個人として身に付けたい力に「深い関連のある領域」と「関連の薄い領域」について，事前と事後の調査を比較しても大きな差は見られなかった。しかし，設問10（教師自身の望ましい自己表現力）と設問14（多面的な情報収集力）は校内研修後の実践と関わる内容であり，それぞれ3.9→4.3，3.6→4.0と全設問中で一番大きな伸びがあった。また，参加者からは「学級で構成的グループエンカウンターを実施した」「以前よりも丁寧な電話対応を心がけている」「発達課題を意識して生徒を見るようになった」など研修で学んだことを実践している様子がうかがえた。一方，組織として身に付けたい力のＢ１（同僚と助け合い協力して活動する力，職場）は，3.8→4.1と大きく上昇が見られた。進行者からは「初めは戸惑いもあったが，誰にでもできる進行係と考え実施できた」，管理職からは「先生方が主体的に取り組める体験型の研修は効果的に思う。職員室の雰囲気がより和やかになり，職務に対しても自主性が高まってきた」とのご意見をいただいた。



Ｂ中学校では,すべての力に関する研修内容を行ったが，特にＡ２（コミュニケーション力），Ａ４（指導困難事例への対応力）では，それぞれ3.8→4.1，3.9→4.1と伸びが見られた。設問９（自己の感受性への気付き）は校内研修の内容に直接関わるものであるが3.2→3.5と大きな伸びがあった。さらに，設問８（保護者と協力関係を結ぶ力）に関しては3.7→4.3とかなり大きな伸びとなった。一方，組織として身に付けたい力では,Ｂ１（同僚と助け合い協力して活動する力，組織），Ｂ２（同僚間で承認感を高め合う職場）は，校内研修前も大変高い数値であったが，どちらも0.2ポイントの上昇が見られた。参加者からは「知っている内容でも他の先生たちと一緒に研修し共有することに意義があると思う」「一人の生徒に対して先生方と情報交換をし，組織的に対応するようになった」との感想があった。進行者からは「生徒指導や教育相談に関する研修はとても有意義なので，年に２～３回は実施できるとよいと思う」，管理職からは「生徒の実態が明確になり，同僚や家庭との連携を意識的に行うようになった。また，一人の生徒をより多角的・多面的に見るようになった」とのご意見をいただいた。

実践資料を用いた校内研修の満足度や理解度については，各実践で述べたとおりである。いずれの学校でも,「できた」「ややできた」などの肯定的な回答が概ね９割以上という結果であり，また，客観的な理解も進んでいた。

以上の結果から,満足感の高い校内研修が行われ，研修で学んだ知識・スキルを実際の指導に生かしていることが分かった。さらに,「組織として身に付けたい力」の向上もうかがえ，中学校においても自校の教員が校内研修を進める校内研修実践資料の有効性が確認できた。

２　校内研修実践資料集の活用のための進行者育成についての考察

⑴　専門研修（教育相談実践講座）における校内研修実践資料集を活用した実習

進行者からは,「初めての私でも資料に沿って実施できた。作り込まれているので時間もぴったりで，内容も十分である」という感想があった。研修

を受けた先生方からは「すぐに実践できそうな内容なので，早速やってみたい」「このような形で校内で研修できるのであれば，時間的なロスもなく，より効果的な研修ができそうだ」など校内研修を行っていきたいという意欲がうかがえた。実際に校内研修実践資料集を活用した実習を行ったことで，研修者が資料の有効性を実感するとともに，資料の活用の仕方や進行の仕方を具体的にイメージすることができ，実践への意欲を高めることができた。

⑵　専門研修（教育相談実践講座）での実習終了後の各学校での研修者による実践

実施者からは，各学校の実情により参加者やニーズに合わせ，校内研修実践資料集から資料を選択して実施したことが報告された。管理職も含めた全校体制で研修を行った学校もあり，全20校での実践で171名の参加者があった（**図５**）。資料の使いやすさに関しては，実践者全員が，全ての資料について「使いやすい」「やや使いやすい」と回答し，高等学校においても，小学校版や中学校版の校内研修実践資料を使用しても無理なく実施できたとの報告があった。

実践者（報告順）	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	合計
校種	小	小	高	特支	小	高	小	高	小	高	小	高	小	中	中	中	中	中	中	小	
活用した校内研修実践資料 小学校版1	○		○		○	○			○									○		○	7
小学校版2							○	○													2
小学校版3										○			○								2
小学校版4					○						○	○		○	○				○		6
小学校版5		○																			1
小学校版6																					0
小学校版7				○																	1
中学校版1												○				○	○				3
中学校版2																					0
校内研修の参加者 校長		○	○		○				○		○		○								6
教頭			○		○				○		○		○							○	6
教諭	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20
養護教諭			○		○	○			○		○	○								○	7
講師			○	○	○	○			○		○	○	○		○	○		○			11
スクールカウンセラー																					0
その他										○	○			○							3
参加人数	7	7	13	16	11	8	3	2	19	2	11	7	12	3	12	6	7	7	13	5	171

図５　活用した資料と参加者等の一覧

また，「実際に教師が体験してみるという研修のスタイルがよい」「パワーポイントにより，より視覚的に理解することができた」「誰でも時間をかけずに準備ができそうなので，ぜひ活用したい」「学級の人間関係づくりや学級開きの参考になった」などという参加者の感想もあった。

一方，実施者からは「校内研修の日程や時間の調整，多くの参加者を集めることはなかなか難しかったが，内容のよさや研修の必要性は強く感じるので，今後もぜひ行っていきたい」との感想も多かった。

３　成果と課題

⑴　研究の成果

①　実践資料を活用し，自校の教員が進行者となって満足感や理解度の高い校内研修を行うことができた。研修内容を生かしての実践にもつながっており，実践資料の有効性を確認することができた。

②　検証・改善を行った実践資料をダウンロードして活用できるようWebサイトに掲載するとともに，各種研修会や出前講座などで資料の紹介と配付を行い，普及を図ることができた。

③　専門研修における「校内研修実習」での体験や，それを受けての研修者の各学校での実践により，進行者の育成ができた。

⑵　今後の課題

①　校内研修実践資料集のさらなるPRや普及のため，冊子を県内全ての小・中学校に送付するとともに，アンケートにより活用状況を把握したい。また，Webサイトに実際の研修場面等の動画も掲載することで研修のイメージを知ってもらい，より活用してもらえるようにしたい。

②　より精選された校内研修実践資料集とするため前述のアンケートにより見直しの視点を収集し，利用者の声を取り入れた資料の見直しを進めたい。

〈参考・引用文献〉

１）教員研修評価・改善システムの開発に関する研究
（広島県立教育センター研究紀要第35号　2008年）
２）教育研修の効果測定と評価のしかた
平松陽一著　（日興企画　2010年）
３）研修の効果的な運営のための知識・技術
（独立行政法人教員研修センター　2011年）
４）生徒指導提要　　　　　（文部科学省　2010年）
５）教育カウンセラー標準テキスト初級・中級・上級編　　　　　（図書文化　2004年）